

令和 5 年 9 月 19 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01342

研究課題名（和文）国家形成前段階における親族構造の地域的変異に関する研究—九州南部を中心に

研究課題名（英文）A research on the regional difference of pre-state formation kinship structure in southern Kyushu

研究代表者

岩永 省三（Iwanaga, Shozo）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・客員研究員

研究者番号：40150065

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,300,000円

研究成果の概要（和文）：国家形成前段階における親族構造の地域的偏差の様相を、九州地域出土の古人骨資料の形質人類学・骨考古学的研究に基づいて明らかにした。また、考古学的研究により、九州南部地域の集団の社会的地位や財の継承方法、集団の階層分化の様相も明らかにし、当該地域が律令国家に編入される前の社会組織の様相を明らかにした。

九州南部地域の集団は、古墳時代に地下式横穴墓などの地域性が強い墓を造営し、5世紀まではヤマト王権と交渉し、多くの威信財を入手する機会を有した。しかし、6世紀以降、しだいに高塚造営地域との文化的交流が疎となり、社会組織や統合の在り方が高塚造営地域と懸隔が大きくなった。その様相・プロセスを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本列島の先史時代の文化は一様ではなく地域性があった。日本列島の南端である南部九州地域の集団は、古代には文化的異質性から「隼人」と呼ばれるようになり、軍事的征服の対象とされた。本研究は、当該集団の形質的特徴の発現過程を明らかにするとともに、彼らの文化的異質性がいつからどのように顕著になり、その原因は何であったのかを解明した。特に、古墳時代の親族組織の在り方が、社会組織や儀礼の在り方に大きく作用していることを明らかにした。これは東北地方の「蝦夷」と呼ばれた集団の歴史の研究にも応用できるであろう。

研究成果の概要（英文）：Our group revealed the regional deviation of pre-state formation kinship-structure based on the physical anthropological and osteological analysis of human bones excavated from Kyushu Region. We also analyzed the social status of the people in ancient southern Kyushu, their way of succeeding goods, and the stratification of those people. Based on these, we revealed the social structure in this region before it was incorporated into Ritsuryo-system. During the Kofun Period, people in this area constructed local type of tombs: underground horizontal hollow tomb. Until the 5th century, they kept in touch with Yamato kingship and got many opportunities to gain prestige goods. However, they became disassociated from the area where burial mounds were constructed, and this resulted in enlarging the difference of social structure and the way of governance between them. Our group revealed the details and processes above.

研究分野：日本考古学

キーワード：国家形成 親族構造 九州南部 形質人類学 考古学 地下式横穴墓 古人骨

1. 研究開始当初の背景

親族組織の在り方と、財や地位の継承法、社会統合のあり方には密接な関係があり、日本列島においても、国家の形成期（古墳時代後半期）には、それらは相互に跛行性は持ちつつも、有機的に関連しつつ変動していった（岩永 2003）。しかし、当然ながら日本列島内でその過程が均質に進みはせず、古墳時代における社会の発展段階には地域的偏差があった。九州南部地域には、古墳時代の後半期に、後の7世紀の国家形成期に中央政権から隼人・熊襲と呼ばれるようになった異文化集団が成立した。「後進的」とも評価されてきた九州南部地方の古墳時代集団の親族組織や社会組織の実態はいかなるものであったのか。

古墳時代において日向及び大隅の東部地域では、5世紀まで高塚古墳が造られた。他方、薩摩及び大隅地域の大部分では高塚古墳は作られず、地下式横穴墓や地下式板石積石室墓などの特殊な墓（墳丘を有すものはある）が造られた。これら非高塚古墳造営地域の集団も5世紀までは大和王権や高塚古墳造営地域の諸集団と交渉を持ち、鉄製武器などの威信財を入手したが、6世紀以降に高塚造営地域との文化的交流が疎となり、後に隼人・熊襲と呼ばれる異文化集団が成立し、社会組織や統合のあり方において高塚古墳造営地域との懸隔が大きくなっていく。

これら非高塚古墳造営地域集団の実態については、集落や墓制、土器などの物品からの研究がなされてきたが、社会組織については未解明な部分が多かった。

社会組織のうち集団の親族構造がどうであったのか。古墳時代から古代にかけて文化的に「後進性」を増すと言われてきた九州南部の集団の親族構造の実態とその成因が問題である。彼らの財や地位の継承方式がどうであったのか。彼らが日常的に営んでいた集団の結合紐帯は何であったのか。また、親族組織の在り方が、一定領域をカバーする社会的統合体の編成方式にも影響を与えたはずであり、どのような質の統合体が成立していたのかが解明すべき問題となる。地下式横穴墓には甲冑などの豪華な威信財が豊富に副葬されている。彼らがそれらを入手できた要因は何か。彼らと大和王権あるいは九州の高塚古墳造営地域集団との交流の様相が問題となる。九州南部の横穴墓造営集団の他集団との関係（人・物・情報のやり取り）の推移を考古学あるいは形質人類学から詳細に跡付ける必要を認識した。

2. 研究の目的

九州南部地域では、古墳時代において地下式横穴墓などの非高塚墓制が盛行した。当該地域の集団は、5世紀までヤマト王権と交渉し、多くの威信財を入手する機会もあったが、6世紀以降、高塚と地下式横穴墓が混在する宮崎平野部を除いて、しだいに高塚造営地域との文化的交流が疎となり、後の7世紀の国家形成期に中央政権から隼人・熊襲と呼ばれるようになった異文化集団が成立し、生活様式などの文化的方面で高塚古墳造営地域との懸隔が大きくなっていく。しかし、「後進的」とも評価されてきた南九州地方の古墳時代集団の親族組織や社会組織の実態はあまり明らかになっていない。国家形成史においては、周辺部の異文化集団に対する中央政権の認識や施策が問題とされてきたが、周辺部社会の実態がいかなるものであったのかを、親族組織や内的統合水準に着目して明らかにする必要がある。本研究の目的は、異文化集団とも評価されてきた九州南部地域の非高塚古墳造営地域集団の親族組織の実態を、形質人類学的方法、自然科学的方法で解明するとともに、考古学的研究により、当該地域の集団の社会的地位や財の継承方法、集団の階層分化の様相も明らかにし、当該地域が律令国家に編入される前の社会組織の水準を明らかにすることである。

3. 研究の方法

（1）人骨資料の残存状況が良い地下式横穴墓に関わる考古学的・人類学的情報を研究に使用できる水準まで統合・整理する。地下式横穴墓出土の人骨資料を墳墓ごとに分析し、埋葬順を復元し、歯冠計測による血縁関係推定を行い、考古学的情報と総合して、同一墳墓に埋葬された個体の親族関係を復元し、さらに墳墓群全体で財や地位の継承がいかに行われていたのかを解明する。特に宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群は、多くの人骨が出土したにもかかわらず、調査が古く、情報が整理・公開されていない。そこで同横穴墓群出土の人骨の埋葬状況、特に埋葬の順序や片付けの状況、副葬品と人骨の関係などを実測図と写真を照らし合わせて復元する。

（2）地下式横穴墓から出土した人骨資料の形質人類学的研究を行う。

○親族構造復元の基礎として、人骨資料の残存状況が良い地下式横穴墓出土人骨の歯冠計測による血縁者推定を行う。○横穴墓出土人骨の筋付着部の発達度分析から被葬者の身体活動の復元を行う。○性別や年齢および生活水準・栄養状態を示すストレスマーカーの検討（エナメル質減形成やクリブラ・オルビタリア、骨膜炎）を行う。各ストレスマーカーは、個体の生涯のある段階での栄養不良や感染症の結果であると考えられており、これらを検討することで、骨にあらわれる被葬者の生前の生活・栄養状況の特徴を明らかにする。

(3) 非高塚古墳造営集団の社会構造の実態を考古学的方法で解明するために、当該地域の古墳時代における、墳墓群および集落の内部構造の分析、あるいは個々の墳墓や住居址からの出土品の考古学的検討を行う。具体的には、地下式横穴墓について墓ごとに副葬品と被葬者の関係を確定し墓の代表者の認定を行う。墓群内で、副葬品組成、墓室構造・規模、墳丘の有無等から墓群の階層構造の分析を行う。墓群内で、墓の分布、立地、階層構造から群構造の分析を行う。さらに単一の墓群だけでなく、墓群間、地域を越えた地下式横穴墓群の比較分析を行う。

(4) 以上の形質人類学的検討の結果と考古学的検討の結果を総合して、南九州地方の非高塚古墳造営集団の、形質的特徴と副葬品や埋葬順序などの被葬者の属性との相関から社会的地位との関連を明らかにし、各集団の親族構造や階層構造を明らかにする。南九州地方の非高塚古墳造営地域集団の社会組織の様相、集団の結合紐帯の実態、政治的統合体の質を明らかにする。この結果を同時期の九州中部や北部の高塚古墳造営地域の状況と比較し、その差異を明らかにすることで、社会の発展段階における相違の様相を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 九州南部地域の地下式横穴墓造営集団の親族構造を解明した。研究史をたどると、田中良之の人骨資料に基づく親族構造研究により、5世紀後半以降、西日本においては、双系的血縁関係(基本モデル)から父系の埋葬原理(基本モデル)に転換していく状況が広く認められることがあきらかとされてきた(田中 1995・2008)。一方、南九州においては近年まで古墳(地下式横穴墓)の親族関係の分析例がなかった。2010年に至り、田中を中心とする本研究の分担者らの研究チームは、宮崎県内陸部の西諸県地域に位置する旭台地下式横穴墓群と立切地下式横穴墓群について、歯冠計測を含む出土人骨の分析、複数埋葬における世代構成の復元などにより、この墓群を造営する集団の親族関係が、キョウダイ原理に基づく双系的血縁関係(基本モデル)(田中 1995)であることをあきらかにしていた(田中・舟橋・吉村 2012)。本研究では、宮崎県えびの市・島内地下式横穴墓出土の多量の人骨の埋葬状況などを実測図と写真を照らし合わせて復元する作業を実施し、墓の中での被葬者の取り扱い、埋葬間隔、埋葬順位や片付けの状況、副葬品の被葬者への帰属を検討し、財や地位の継承が双系的に行われていることを再確認し、田中らの成果が当該地域内で普遍性を有すことについて見通しを得ることができた。

また、九州南部の地下式横穴墓造営集団の大部分が、6世紀に新たに施行された全国支配制度たる国造制・部民制・ミヤケ制に組み込まれなかった事情の解明(成果6)につながった。

(2) 親族集団に関して、儀礼行為に注目し新たな知見を得た。先行研究において親族関係の変化とともに変化することが指摘されていた儀礼行為について報告事例の集成を行い、古墳時代後期に汎列島の盛行する複数個体をまとめて再度埋葬する「改葬」行為が、南九州ではほとんど確認できない点を明らかにした。これに対して九州南部以外では、改葬行為の盛行という個体を集団にまとめ上げる即物的な儀礼行為が、「部民制」の施行という政治的背景に基づく親族集団の解体/再編成の動きと時間・空間的に合致していることを明らかにした。これらの結果から、九州南部では部民制が施行されておらず、親族集団の不自然な解体/再編成が行われていないことが、改葬行為が盛行していない要因の1つになっていると認められる。これは、九州南部地域が、国造制・部民制・ミヤケ制の施行対象地域に編入されなかったことと関係し、地下式横穴墓造営集団の社会組織の在り方が政治的制度の導入の可否に大きく作用したことが判明した。

(3) 九州の古墳時代人の形質的地域性の発現過程を解明した。九州の古墳時代集団の頭蓋形質については、1980~1990年代に、各地の古墳時代人骨の特徴が総括的に検討され、古墳時代人骨の形質に地域差が存在し、その要因は弥生時代における大陸からの遺伝的影響の強弱にあると指摘されていた。その後、古墳時代人骨の出土事例が増加したことから、本研究では、九州の古墳時代集団の形質的特徴やそれを生み出した歴史的背景を再検討するため、九州における地域間比較や南九州の古墳人の形質的特徴をさらに鮮明にし、特に、頭蓋と四肢骨の形質的地域性について分析し、形質的地域性の発現過程を解明した。

頭蓋形質については、分析対象集団の地域区分を再設定し、先行研究で形質的地域性が顕著とされた顔面部形態に着目し形態分析をおこなった。先行研究では山間部の集団は低顔・低眼窩傾向が強く、平野部の集団は山間部集団より高顔・高眼窩傾向がやや強いことが指摘されてきた。今回の再検討で、南九州の古墳時代集団に先行研究成果とは異なる細かな地域性があると判明し、山間部のえびの市・島内地下式横穴墓では高顔・高眼窩傾向が強い個体が確認された。こうした地域性の背景には、弥生時代における渡来人による遺伝的影響の拡散だけでなく、古墳時代における朝鮮半島・日本列島内の地域間交流による影響も想定する必要がある。これは島内地下式横穴墓群を営んだ集団に豊富な武器類や威信財をもたらした背景(人・

物・情報の往来)の検討に有効である。

また、先行研究で検討されてこなかった四肢骨の形質、特に生業などの日常活動による身体的負荷に強く影響を受ける断面形態についても分析した。分析の結果、南部九州の古墳時代集団には、縄文時代集団に特徴的な大腿骨の柱状性や脛骨の扁平性が認められず、縄文時代集団よりも北部九州・山口地域の弥生時代集団に類似しており、南部九州古墳時代集団の日常活動による身体的負荷は縄文時代集団とは異なっていたと判明した。先行研究では、南九州古墳時代集団の形質は、頭蓋形質も含め、在来の縄文人集団との類似性の強さが指摘されてきたが、今回の研究によって、両者の形質には相違があり、完全に一致するものではなく、南九州古墳時代集団の形質は地域的に多様であることがわかった。なお今回、古墳時代との比較に用いるため、階層社会のモデルケースとして江戸時代の階層社会におけるMSMsの個体差を検討し、階層間の身体活動の差を明らかにした。

(4)南九州地域の古墳時代社会の様相の相対化のために、日本列島の周辺地域、具体的には、西北九州地域、北関東地域の古墳文化との比較研究を進めた。あるいは発展段階的に比較可能な外国地域の文化、具体的にはブリテン諸島の鉄器時代後期文化との比較検討を進めた。

古墳時代を中心として、古代国家形成期における威信財授受と親族関係を検討し、モニュメント造営と威信財授受との関係について検討した。そこにおける鏡の副葬の問題、被葬者の構成と副葬品の関係、追葬の問題について、列島の周辺地域という点に注目し、九州と各地の資料を対比する形で検討した。

列島の古代国家形成においては、いわゆる国際的契機と呼ばれるような列島外部との関係において社会の複雑化や統合が行われる場合が多いこと、列島の古墳時代においてみられるモニュメント造営と威信財授受の結びつきは、世界的には必ずしも自明でなく、列島の古墳時代開始過程の歴史的コンテクストを背景とした特徴的なあり方であることなどについて議論を行った。また古墳時代の前半期において、親族関係が双系で世代間継承が不安定であることが、モニュメント造営や威信財授受が各地の上位層の世代交代を契機として行われることと結びつくことなどについて検討した。この結果として、列島の広い範囲で中心・周辺関係が形成・再生産されるあり方と、周辺地域がその枠組みの中に組み込まれる様相について、考古学的な観点から具体的に論じた。

(5)地下式横穴墓について墓ごとに副葬品と被葬者の関係を確定し墓の代表者の認定を行った。墓群内で、副葬品組成、墓室構造・規模、墳丘の有無等から墓群の階層構造の分析を行った。墓群内で、墓の分布、立地、階層構造から群構造の分析を行った。さらに単一の墓群だけでなく、墓群間、地域を越えた地下式横穴墓群の比較分析を行った。地下式横穴墓を造営する社会で、双系の親族関係を維持する社会構造に起因するとみられる女性の武装、軍事への関与が明らかとなった。

(6)国家形成期における地域社会と親族組織の関係について検討した。親族組織の在り方と、財や地位の継承法、社会統合のあり方には密接な関係があり、日本列島においても、国家の形成期には、それらは相互に跛行性は持ちつつも有機的に関連しつつ変動していった。しかし、日本列島内でその過程が均質に進みはせず、古墳時代における社会の発展様相には地域的偏差があった。本研究では九州南部地域と東北南部地域について検討した。

九州南部の地下式横穴墓造営集団は、6世紀前半まではヤマト王権と交渉し多くの威信財を入手する機会もあったが、6世紀以降、しだいに高塚古墳造営地域との文化的交流が疎となり、社会組織や統合の在り方において、両者の懸隔が大きくなる。当該集団の親族組織は、5世紀代に双系社会で父系化が遅れ6世紀代までそれが継承されたため、財・地位の継承単位が明確化しておらず、安定した首長系譜と首長層の階層的秩序が未成立であった可能性が強い。これが前方後円墳造営地域から離脱し、国造制・部民制・ミヤケ制の施行がなされなかった背景とみなせる。東北南部においても、後期の前方後円墳造営域と国造制施行域が阿武隈川下流域以南となり、それ以北に及ばなかった事情として、社会の在り方、親族組織の在り方の地域差が効いている可能性を考えるべきであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計34件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 米元史織	4. 巻 20
2. 論文標題 北部九州の弥生時代人達 いわゆる渡来系形質について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州大学総合研究博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 米元史織	4. 巻 19
2. 論文標題 北部九州の弥生時代人 - 頭蓋形質の地域性について -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州大学総合研究博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 33-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 米元史織	4. 巻 54
2. 論文標題 MSMsの時期的変遷からみる江戸時代武士の行動様式の確立	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学	6. 最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 米元史織	4. 巻 501
2. 論文標題 骨から探る日本人の起源 - 九州大学総合研究博物館の古人骨 2022	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西日本文化	6. 最初と最後の頁 20-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米元史織	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 MSMsの時代間比較から明らかにする社会的不均質性の進展	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩永省三先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 809-831
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米元史織・舟橋京子・足立達朗・右島和夫・小林正春・中野伸彦・小山内康人	4. 巻 162
2. 論文標題 溝口の塚古墳被葬者の歯牙ストロンチウム同位体比分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 長野県考古学会誌	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村和昭	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 地下式横穴墓と古墳時代の地域社会	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学協会2022年度福岡大会研究発表資料集	6. 最初と最後の頁 135-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村和昭	4. 巻 771
2. 論文標題 総論 古墳時代の甲冑製作・生産組織の実態解明にむけて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村和昭	4. 巻 第16号
2. 論文標題 六野原古墳群・地下式横穴墓群出土甲冑の研究 - 六野原1号地下式横穴墓出土横矧板鋌留短甲 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮崎県立西都原考古学物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 春日宇光・吉村和昭・小林謙一	4. 巻 162
2. 論文標題 飯田市新井原古墳群・石行古墳群出土甲冑の研究(1) - 石行2号墳の三角板鋌留短甲について -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 長野県考古学会誌	6. 最初と最後の頁 15-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舟橋京子、	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 古墳時代の親族関係と儀礼	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学協会2022年度福岡大会研究発表資料集	6. 最初と最後の頁 113-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舟橋京子	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 古墳時代横穴墓に見られる改葬行為に関する試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩永省三先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 335-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舟橋京子	4. 巻 48号
2. 論文標題 東日本古墳時代抜歯風習の研究 関東地方を対象に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本考古学	6. 最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 副葬品からみた伊都国王の実像	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第6回伊都国フォーラム「伊都国王がみた世界 弥生時代の王権・外交・生産	6. 最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 18
2. 論文標題 博多湾沿岸地域の古墳時代後期社会 那津官家の時代	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 市史研究ふくおか	6. 最初と最後の頁 42-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 160
2. 論文標題 前方後円墳の築造停止とその背景 北部九州を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 55-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 古墳時代の威信財授受と親族関係	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学協会2022年度福岡大会研究発表資料集	6. 最初と最後の頁 91-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 1巻
2. 論文標題 鏡の副葬	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『シリーズ地域の古代日本 筑紫と南島』	6. 最初と最後の頁 85-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 一貴山銚子塚古墳の埋葬施設・副葬品とその意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第5回伊都国フォーラム「玄界灘を見据えた巨大古墳 - 一貴山銚子塚古墳と釜塚古墳」糸島市役所文化課	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 35
2. 論文標題 古代国家形成期におけるモニュメント造営と威信財 日本列島の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『社会進化の考古学 都市・権力・国家』雄山閣、季刊考古学別冊	6. 最初と最後の頁 69-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 ブリテン諸島の鉄器時代後期における鏡の流通と地域間交流	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩永省三先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 691-716
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 158号
2. 論文標題 古墳時代開始前後における西北九州地域の鏡とその変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 49-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 綿貫観音山古墳出土鏡をめぐる諸問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 綿貫観音山古墳のすべて(群馬県立歴史博物館)	6. 最初と最後の頁 180-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 1
2. 論文標題 鏡から古墳時代社会を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北条芳隆編『考古学講義』ちくま新書	6. 最初と最後の頁 221-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷澤 亜里	4. 巻 第69巻第2号
2. 論文標題 弥生・古墳時代の玉類にみる長期保存	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 考古学研究	6. 最初と最後の頁 28-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高椋浩史	4. 巻 19
2. 論文標題 九州における古墳時代人骨の頭蓋形態の研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州大学総合研究博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高椋浩史	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 九州における古墳時代人骨の四肢骨形態の研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩永省三先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 407-426
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高椋浩史・米元史織	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 古墳時代人骨の地域性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学協会2022年度福岡大会研究発表資料集	6. 最初と最後の頁 125-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩永省三	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 古墳時代の親族関係と古代国家形成2022	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学協会2022年度福岡大会研究発表資料集	6. 最初と最後の頁 103-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩永省三	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 展望：6・7世紀史の考古学的研究2022	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学協会2022年度福岡大会研究発表資料集	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩永省三	4. 巻 114巻1号
2. 論文標題 エンゲルスの国家理論と日本古代史学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三田学会雑誌	6. 最初と最後の頁 51-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 足達悠紀・米元史織・山下理呂・松尾樹志郎・舟橋京子	4. 巻 -
2. 論文標題 位登古墳出土人骨の形質人類学的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 田川市内埋蔵文化財試掘・確認・発掘調査報告(2)(田川市教育委員会)	6. 最初と最後の頁 83-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 蓮田賀子・米元史織・足達悠紀・小高蒼大・舟橋京子	4. 巻 -
2. 論文標題 城山横穴群Y73号墓出土人骨について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 城山横穴群（福智町教育委員会）	6. 最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田淵朱莉・米元史織・足達悠紀・舟橋京子	4. 巻 -
2. 論文標題 四日市遺跡出土人骨について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 四日市遺跡（大分県立埋蔵文化財センター）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 米元史織
2. 発表標題 北部九州の弥生時代人頭蓋形質の地域性について
3. 学会等名 ふるさと歴史講座（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 舟橋京子
2. 発表標題 古墳時代の親族関係と儀礼
3. 学会等名 日本考古学協会2022年度福岡大会・研究発表分科会2 『古墳時代の親族関係と地域社会』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉村和昭
2. 発表標題 地下式横穴墓と古墳時代の地域社会
3. 学会等名 日本考古学協会2022年度福岡大会・研究発表分科会2 『古墳時代の親族関係と地域社会』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉村和昭
2. 発表標題 地下式横穴墓における造墓と空間構成原理
3. 学会等名 九州史学会考古学部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 副葬品からみた伊都国王の実像
3. 学会等名 第6回伊都国フォーラム「伊都国王がみた世界 弥生時代の王権・外交・生産」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 古墳時代の威信財授受と親族関係
3. 学会等名 日本考古学協会2022年度福岡大会・研究発表分科会2 『古墳時代の親族関係と地域社会』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 博多湾沿岸地域の古墳時代後期社会 那津官家の時代
3. 学会等名 第16回福岡市講演会「考古学からみた福岡の歴史」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 一貴山銚子塚古墳の埋葬施設・副葬品とその意義
3. 学会等名 第5回伊都国フォーラム「玄界灘を見据えた巨大古墳 - 一貴山銚子塚古墳と釜塚古墳」糸島市役所文化課（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 鏡から見た弥生時代の交流 原の辻遺跡出土鏡から考える
3. 学会等名 東アジア国際シンポジウム「光り輝く青銅器を求めてー原の辻遺跡出土青銅器から見た東アジア交流ー」長崎県埋蔵文化財センター
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 鏡の図像と古代中国の天文景観
3. 学会等名 第4回考古天文学会議（基盤研究A・研究代表者：北条芳隆）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 沓岐における大型古墳群造営と古代東アジア
3. 学会等名 九州史学会シンポジウム「国際的視座から見た沓岐国 島史」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 Center and periphery in the process of ancient state formation in the Japanese archipelago : From the viewpoint of Northern Kyushu region
3. 学会等名 日本考古学協会（英文機関誌編集委員会による国際セッション「国家形成過程の国際比較研究」、英語による発表）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 古代国家形成期におけるモニュメントの造営と威信財－日本列島の事例から－
3. 学会等名 シンポジウム『社会進化の比較考古学』
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 三国志の時代と卑弥呼の鏡
3. 学会等名 特別展『三国志』記念特別講演会（九州国立博物館）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 福岡県五郎山古墳の横穴式石室をめぐる諸問題
3. 学会等名 九州史学会考古学部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高椋浩史・米元史織
2. 発表標題 古墳時代人骨の地域性
3. 学会等名 日本考古学協会2022年度福岡大会・研究発表分科会2 『古墳時代の親族関係と地域社会』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩永省三
2. 発表標題 古墳時代の親族関係と古代国家形成
3. 学会等名 日本考古学協会2022年度福岡大会・研究発表分科会2 『古墳時代の親族関係と地域社会』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩永省三
2. 発表標題 展望：6・7世紀史の考古学的研究2022
3. 学会等名 日本考古学協会2022年度福岡大会・公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩永省三
2. 発表標題 古墳時代親族構造論と古代史研究
3. 学会等名 2019年度九州史学会シンポジウム『考古学・歴史学における学際融合研究の最前線』
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 角川書店	5. 総ページ数 410
3. 書名 鏡の古代史	

1. 著者名 岩永省三	4. 発行年 2022年
2. 出版社 すいれん舎	5. 総ページ数 560
3. 書名 古代国家形成過程論－理論・針路・考古学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉村 和昭 (Yoshimura Kazuaki) (10250375)	奈良県立橿原考古学研究所・企画学芸部学芸課・課長 (84602)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高椋 浩史 (Takamuku Hirofumi) (10759418)	九州大学・アジア埋蔵文化財研究センター・学術研究者 (17102)	
研究分担者	石田 智子 (Ishida Tomoko) (40624359)	鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授 (17701)	
研究分担者	米元 史織 (Yonemoto Shiori) (40757605)	九州大学・総合研究博物館・助教 (17102)	
研究分担者	辻田 淳一郎 (Tsujita Jyunichirou) (50372751)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	舟橋 京子(石川京子) (Funahashi Kyoko) (80617879)	九州大学・比較社会文化研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	谷澤 亜里 (Tanizawa Ari) (50749471)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員 (84604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関